撮影：山田新治郎（表紙、並びに当ページ）

六華苑

三重県桑名市

三月も後半というのに冷え込む日が続いたある日の午前。エアリーブルーの洋館二階のサンルームは、設計者のジョサイア・コンドルが意図した通り、陽だまりの幸せな空間をつくっていた。三重県桑名市の六華苑である。山林王として知られた実業家、二代諸戸清六の邸宅として一九一三（大正二）年に竣工し、一九九一年に桑名市が諸戸家から建物を寄贈され、九三年から六華苑として一般公開している。洋館と和館、離れ屋（仏間）、日本庭園などで構成され、創建当時の姿をとどめる貴重な文化財だ。

玄関を入って左の渡り廊下を抜けると洋館と和館のちょうど境目に出る。左に洋館のホール、右に和館の長い板廊下と畳廊下が広がり、自由に行き来ができる。当時、洋館を持つ邸宅は財を成した実業家などのシンボルだったが、独立した和洋両館が壁を接してほぼシームレスにつながるつくりは珍しいものだった。

洋館が木造二階塔屋四階建延べ四四一・九四平方㍍、和館が木造平屋一部二階建延べ三六八・一三平方㍍。合計一〇〇畳を超える和館の広大さが際立つ。棟梁は諸戸家のお抱え大工だった伊藤末次郎。洋館の塔屋はコンドルの設計では三層だったが、清六が揖斐川（いびがわ）などの眺望を重視して四層に変更した。一階のベランダとその真上のサンルームの多角的に張り出したデザインは、時々の光の角度で豊かな表情を見せる。

清六が二三歳の若さでコンドルに設計を依頼できたのは、諸戸家が政治家の大隈重信や三菱の創始者・岩崎家との交友があったからと言われている。サンルームの陽だまりに一脚のロッキングチェアが佇む。椅子の傾きは使う人の重心に合わせて変わる。実業家として活発に仕事をした清六のやすらぎの一時がこの場にあったのだろう。

創建当時の写真。邸内にまだ大きな樹木は育っていない。晴れた日は、近くを並行して流れる揖斐川、長良川のきらめく川面が4階建て塔屋から望めたはずだ。優雅に過ぎていく時の流れが伝わってくる。1997年に洋館、和館が国の重要文化財に、2001年に庭園が国の名勝に指定されている。（提供：桑名市）